

120年を超えて新たな歴史の構築を

千葉演習林は、120年前の1894年にわが国で最初の大学演習林として創設され、現在の面積は2,226haあります。創設の翌春には、現在まで続いている造林学の実習としての植林が、手探りで始まりました。当初から大規模な植林が進められた結果、100年を超える高齢林が多く分布し、人の手と自然の力が絶妙に作用して、様々なタイプや林齢の森林が成り立っています。

演習林は、学内外から実習や研究を受け入れるだけでなく、それらと連携あるいは独自に教育や

研究を進めているところです。千葉演習林は、特にその歴史の前半では、植林に始まる人工林の育成や製炭のような林産物生産にかかわる技術開発と全国への普及において、大きな役割を果たしてきました。また、森林の成立には長い時間がかかりますので、長期の調査を視野に入れた試験地が数多くあります。その中で、いずれも1930年代に始まったスギ品種成長試験、300年計画のモウソウチク開花試験のような調査地は、今で



100年を超えるスギ人工林

は見学コースの目玉になっています。近年は、将来を見据えてこの森林を守っていくために、高齢人工林の成長や管理、マツ枯れに抵抗性のマツの育成、絶滅に瀕したヒメコマツ地域個体群の保全といったテーマに取り組んで成果をあげています。

持続的な森林管理を続けている演習林の森林は、悠久の姿を保っていると思われるかもしれませんが、120年前と現在とではその姿は大きく異なっています。当時は原野や薪炭林（二次林）が広がっていましたが、今や人工林

や旧薪炭林は大きく育ち、豊かな森林になりました。森林管理の方向は、そのときどきの社会情勢の要請を受けて変わってきます。今は針葉樹と広葉樹が混成した森林の育成も求められており、そのための試験地も設定しました。木材価格の低迷、シカ、イノシシをはじめとする野生動物の増加など問題が山積していますが、演習林の森林が今後どのように変遷していくか、長期的視点で見守ってください。



1903年築でなお現役の清澄作業所



造林学の実習で植林している様子

大学院農学生命科学研究科附属演習林千葉演習林長

山田 利博 教授